

ヒバクシャ医療国際協力通信

CONTENTS

- 専門家派遣事業 (韓国)
- 専門家派遣事業 (カザフスタン)
- 韓国医師等へ受入研修を実施
- 第8回永井隆平和記念・長崎賞受賞者決定



▲ 大韓赤十字社の柳 宗夏(ユ ジョンハ) 総裁から感謝盾を受け取る大津留晶(長崎大学病院) 准教授

専門家派遣事業

NASHIMでは、これまでに受け入れた研修者のフォローアップや関係機関との調整・意見交換のため、韓国、チェルノブイリ関連国及びカザフスタンなどへ専門家を派遣しています。今号では、大津留准教授、富永医師の韓国訪問と永山教授のカザフスタン訪問の報告を掲載します。

2009年 NASHIM 韓国専門家派遣事業 (釜山医療院視察報告)

長崎大学大学院医歯薬学総合研究科
原爆後障害医療研究施設
分子医療部門 分子治療研究分野 (原研内科)
富永信也



11月26日、NASHIM専門家派遣事業として、長崎大学病院永井隆記念国際ヒバクシャ医療センター 大津留晶准教授、長崎県原爆被爆者援護課保健医療班 山口勇次係長と共に韓国釜山に向かいました。今回の目的は、釜山における被爆者医療の実情把握と今後の健康相談事業のあり方についての意見交換でした。



釜山医療院院長室にて

金海空港から高速バスで釜山市内に入った後、車で10分程のところにある釜山医療院を訪問しました。初めに、金東憲(キム・ドンホン)院長とお会いし、院長より「自分は福岡にある九州大学医学部に研修に行ったこともあり、日本特に九州には特別の思い入れがある」との挨拶をいただきました。釜山医療院は、1876年に韓国初の西洋式病院として創立され既に140年が経過しており歴史と伝統がある病院で医師約50人、看護師約200人、その他約200人の合計450

人が勤務している病院です。同院は2005年9月より原爆被害者診療協定病院に指定され、在韓被爆者の診療を行っています。診療協定病院になった2005年には、わずか(延べ)11人の被爆者しか診療していませんでしたが、年々診療する被爆者の数は増え続け2008年には(延べ)333人の被爆者が診療を受け、今年もこのままのペースでいけば過去最高の被爆者が診療を受けることになるだろう、とのことでした。

また、同院にはNASHIMが今年11月8日～14日に行った韓国医師等受入研修に参加していた金珉濠(キム・ミンホ)先生もおられ、「NASHIM研修で学んだいろいろなことを韓国での被爆者医療に役立て、少しでも被爆者のための診療を行いたい。」と、おっしゃって下さいました。



釜山医療院院長を囲んで



林先生との熱心な意見交換

さらに、2005年11月在外公館にて健康管理手当の申請ができるように制度が変わってから、被爆者の健康管理手当用診断書を書いて下さっている林知香（イム・ジヒャン）先生（家庭医学科）とお会いし、健康管理手当申請時の注意点などについて意見交換を行いました。

その後、翌日に行われる大韓赤十字社創立104周年記念式典に出席するために、韓国の新幹線といえるKTXで一路ソウルへ向かいました。釜山～ソウルは約3時間かかりますが、日本の新幹線と比べると、車内が静かで揺れも少なく大変快適でした。

11月27日、ソウル市ウリ銀行本店で行われた授賞式で、大津留先生が大韓赤十字社の柳宗夏（ユ・ジョンハ）総裁から「事業支援」部門で感謝盾を授与されました。大津留先生はNASHIMが行っている韓国からの医師等受入研修事業や韓国への専門家派遣事業の窓口となっており、研修機関との連絡調整に尽力されていること、また長崎県や長崎市が行っている在韓被爆者健康相談事業や渡日治療に対する真摯な態度及び在韓被爆者支援の中心的な役割を果たしてきたことが高く評価され今回の受賞となりました。改めて大津留先生、受賞おめでとうございます。



大韓赤十字社職員からの祝福

最後になりましたが、今回通訳として同行していただいた呉尚恩（オ・サンウン）さんを始め、大韓赤十字社の方々の細やかな心配りにより大変充実した韓国訪問となりました。この場を借りて感謝申し上げます。ありがとうございました。



総裁を中央に記念撮影(右から2人目が大津留晶准教授)



原子の湖(atomic lake)

反応を始め、湖畔での線量は約50m Sv/年まで上昇、CT検査5-10回分くらいに相当します。短時間の滞在は全く安全ですが、気持ちのいいものではありませんでした。帰りに被爆村として有名なズナメンカ村に寄り診療所見学。市内の病院・センターなどの施設も日本に比べるとまだまだですが、特に田舎は格差が激しいのには驚きました。

29日、核実験中止記念式典と第5回セミパラチンスク国際会議出席。国際会議とはいえ参加者の多くが国内からで、政府の援助がなかった今年はかなり規模が縮小されたとの事。小生が長崎大学のグローバルCOEプログラム「放射線リスク制御国際戦略拠点」の概要とこれまでの成果について、高村教授がこれまでのセミパラにおける分子疫学研究をまとめて報告しました。なお、優秀学生2名への長崎賞の授与を執り行いました。他に長年セミパラチンスクで医療貢献されている長崎医療センタースタッフの皆さんらも発表されていました。最後に大統領の核廃絶宣言を読み上げて終了。

30日、日曜日。マラット先生の案内で日曜バザールと森でのキノコ採りへ（高村先生が放射線測定のため必要、決して遊びではありません）。昼食は自宅へ招待していただき、お手製のウク



式典での講演

ライナ・ボルシチとカザフスタンの伝統料理・ベシュバルマックをご馳走になりました。夜はNASHIMの同窓会へ参加。今まで長崎で研修したセミパラチンスク在住の約10名の医師に集まっていただき、研修の

感想など語り合い、楽しい会でした。



カザフスタン私立医科大学での講義

31日、朝からアルマティに戻り、カザフスタン私立医科大学でガビット先生の通訳を通して講義。休日にも拘らず約50名ほどの学生が聴講に来てくれました。夜は、アルマティ在住のNASHIM研修医師と夕食。2夜連続でNASHIM研修生の感想（NASHIMで受けた研修が現在も役に立っていること、今後も受入研修を行い、カザフスタンの医療向上に力を貸してほしい等）をいろいろ聞いたことは今後のNASHIM活動のあり方を考えるにあたっては良いことでありました。

31日、日本・カザフスタンの友好関係におけるNASHIMの事業と長崎大学の国際保健活動の貢献の大きさを痛感しながら韓国・福岡経由で無事帰崎。

最後にカザフスタン訪問の機会を与えてくださったNASHIMと今回の訪問に関してお世話になったカザフスタンの関係者の方々に深謝いたします。ところで、当地での肉だらけの食事とウォッカ・コニャック攻めには閉口しました。もっと健康的な食習慣を身につけてほしいものです。

受入研修事業

韓国医師等へ受入研修を実施

韓国に居住している被爆者への医療充実のため、被爆者の医療や援護に携わる6名の関係者を招いて、受入研修を実施しました。研修者は11月8日に来崎し、事務職3名は11月12日まで、医療職3名は11月14日まで長崎に滞在して、長崎原爆病院をはじめとする医療機関や長崎大学などの研究機関等で被爆者医療に関する知識の習得や情報交換を行うとともに、原爆資料館などを訪れ被爆の実相についても学びました。

研修後の感想



ソウル赤十字病院 内科医 宋 征勲(ソン・ジョンフン)

韓国で原爆被爆者の診療に携わっていましたが、原爆により発生しうる問題点については十分な理解がなく、一般の患者と同じように診療しながらも、なんだか私が被爆者のためにやるべきことを看過しているのではという漠然たる不安感を抱いていました。

しかし、今回の研修を通して、こういった不安感を払拭して帰ることが出来ました。特に最後の2日間の講義(放射線の基本知識についてと日本の医療体系について)は本当に有意義な時間でした。

仁川赤十字病院 内科医 李 承姫(イ・スンヒ)

月曜日、最初に今回の研修のためのオリエンテーションがあつてよかつたと思います。火曜日、長崎大学病院の見学と概要講義も非常に興味深く、午後の長崎原爆病院も印象的でした。水曜日、検診センター訪問と日程はシンプルでしたが、充実した有意義な研修でした。午後の原爆ホーム訪問がキャンセルになって残念でしたが、その代わりにグラバー園等長崎を楽



しむ事ができました。長崎はただの小さな都市ではなく、日本がはじめて西洋に向けて門を開き、先進文化(西洋文化)を受け入れた意味のあるところであることを学ぶことができました。木曜日、金曜日の講義は講義の内容も、また先生方の説明も良かったです。

釜山医療院 内分泌内科医 金 珉濠(キム・ミンホ)

今回の研修で印象深かったことを大きく3つに分けることができます。

①医学セミナー

広島と長崎であつた被爆は世界のどこの国も経験したことがない事件です。原爆と疾患との因果関係、治療対策に対して大きな関心を持てるようになりました。

②長崎大学病院、長崎原爆病院の訪問

原爆被爆者の入院及び検診、治療段階を一目瞭然に見ることができました。

③原爆資料館、平和公園、浦上天主堂の見学

原爆の実状及び危険性に関する適切な情報を提供してくれただけではなく、原爆を経験していない2世代、3世代の人達に放射線及び原爆の危険性とその深刻性を語る場として活用していることをみて、深い感銘



を受けました。

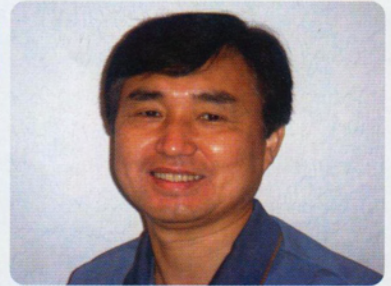
最後に、如己堂の展示を見ながら永井隆先生の崇高な犠牲精神に触れ、医師としての使命についてもう一度考えるきっかけになりました。他の地方に比べて、天主堂が著しく目に入り、カトリック導入の現場を見る機会にもなりました。

大韓赤十字社特殊福祉事業本部 本部長 崔 元鎔(チェ・ウォンヨン)

研修の期間及び日程は適切であり、また事務職と医療職に分けて医療職に対して2日間専門研修を行うことも良いと思う。

最も私の心に残ったことは、永井隆先生が畳2枚の部屋で人類愛を実践するために力を尽くし、その子孫により世界平和のための先駆者の役割を果たしていることを見て、感じて、教育を受けながら、赤十字社の精神と一脈相通ずるものだと思った。その実践のために私もより献身的に努力すべきだと心に誓った。

韓国に「マジュンムル」(呼び水)という言葉があるが、それはポンプに水がない時、一、二瓢の水を入れて、ポンプを上げ下げすれば水が出るという意味で、短い日程ではあったが、この研修をきっかけに世界平和のための活動にNASHIMの関係者の方々と一緒に微力ながら私も参加させていただきたいと思った。



大韓赤十字社特殊福祉事業本部 総務担当 崔 惠善(チェ・ヘソン)

韓赤で原爆被爆者の手当などの支給を担当しながらも実際被爆者の方々がどういう経緯により被爆したのか、韓国で資料と写真だけでの教育は受けていましたが、今回NASHIM研修のお陰で直接現場を目で見ながら、様々な教育を受けることができ実務者としてとても有意義な研修となりました。

火曜日訪問した長崎大学病院において渡日治療で韓国から来られた被爆者の治療過程を直接見ることができ、どのような経緯でどのような病院でどういうふうに通院を受けていらっしやるのかが分かり、とても意義のある時間でした。

今回NASHIMで受けた教育を土台にして、私に任せられた仕事に生かし、より被爆者を理解した上での仕事ができるように頑張ります。

陝川郡役場 係長 金 江浩(キム・ガンホ)

原爆投下後64年が過ぎた今も、被爆者がたくさん苦痛をうけていることから、放射線がどんなに恐ろしいものであるかをもう一度確認することができた。

日本政府は、とても組織的かつ体系的に原爆被爆者のために大学病院だけではなく、医師会などが中心となって被爆者の福祉と健康増進に心血を注いでおり、我々が見習うべきところだと思われる。

わが国の被爆者の中で、現在長崎県に2名が渡日して治療中であることは幸いなことだが、より多くの被爆者が渡日治療を受けられるようにしていただければと思う。

長崎原爆資料館と国立長崎原爆死没者追悼平和祈念館を建て、育っていく学生達に原爆で亡くなられた方々の貴重な犠牲を記憶させ、二度と戦争が起きないようにと平和への誓いの場として活用していることは後世にも継続的な教訓になるので、韓国にもこのような施設を建てるべきだと思った。



第8回永井隆平和記念・長崎賞受賞者決定

NASHIMでは、長崎原子爆弾被爆50周年にあたる平成7年に、原子爆弾により重傷を負いながら被爆者の救護に挺身した永井隆博士の功績を称え、「永井隆平和記念・長崎賞」を創設しています。

この賞は永井博士の崇高な平和希求の精神を引き継ぐ国際社会におけるヒバクシャ医療への貢献者を隔年で顕彰するもので、今年度は第8回目になりますが、この度その受賞者が決定しました。

1. 氏名・年齢

クリストフ ライナー
Christoph Reiners (ドイツ連邦共和国)

1946年1月28日生 (63歳)

2. 役職

ビュルツブルグ大学病院長

3. 受賞理由

放射線誘発甲状腺癌の診断と治療への貢献



ライナー教授はドイツで最も古い大学のひとつであるビュルツブルグ大学医学部を卒業後、一貫して核医学を専攻し、放射線の医療応用、特にアイソトープ(放射性同位元素)を用いた診断と治療への貢献が大きく、レントゲン博士の後継教授でもある。

エッセン大学核医学教授時代の1986年4月26日チェルノブイリ原発事故が起こり、核医学の第一人者として欧州からの医療協力の指導的役割を果たしており、1992年からは最も被害が甚大なベラルーシとの間での人道主義的共同研究プロジェクトを開始している。

功績の1つは、ベラルーシ共和国での甲状腺疾患診断のための三次元超音波診断法を確立し、甲状腺癌の早期診断と再発診断に大きく貢献するなど放射線誘発甲状腺癌に関する多くの学術業績をあげた。また、ミンスクのドロズド教授らと共同で甲状腺腫瘍の超音波スクリーニング方法を開発した。

その後、母校ビュルツブルグ大学核医学教室主任教授では、ミンスク甲状腺癌センターに甲状腺癌のアイソトープ診断と治療のための核医学治療部門を創設し、同様な核医学部門をウクライナのキエフ内分泌研究所にも立ち上げ、多発している甲状腺癌の治療成績向上に大きく貢献した。

また、1992年からベラルーシで再発転移を繰り返す重症小児甲状腺癌の術後患者250例をドイツに招聘し、産業界やEUの財政支援で人道的支援も継続している。

現在WHO緊急被ばく医療研究協力センター長でもあり、チェルノブイリ医療協力の功績によりベラルーシ大統領からフランシスカ・スカリナ勲章を授与された。